

在宅障がい者(児)宅の安心療養環境 を創出する病-宅連携型高度ICT総合 ケアシステムの研究開発

研究代表者:

中村昭則(信州大学病院 難病診療センター)

研究分担者:

滝沢正臣(信州大学病院 総合遠隔診療室)

宮崎大吾(信州大学病院 難病診療センター)

SCOPEプロジェクトで行う研究開発内容

在宅療養・ケアの課題

1. 介護の身体的・精神的負担が増大
2. 在宅療養の支援体制の不足
3. 支援者間で病状やケアが把握できていない
4. 専門医とのコミュニケーションの不足

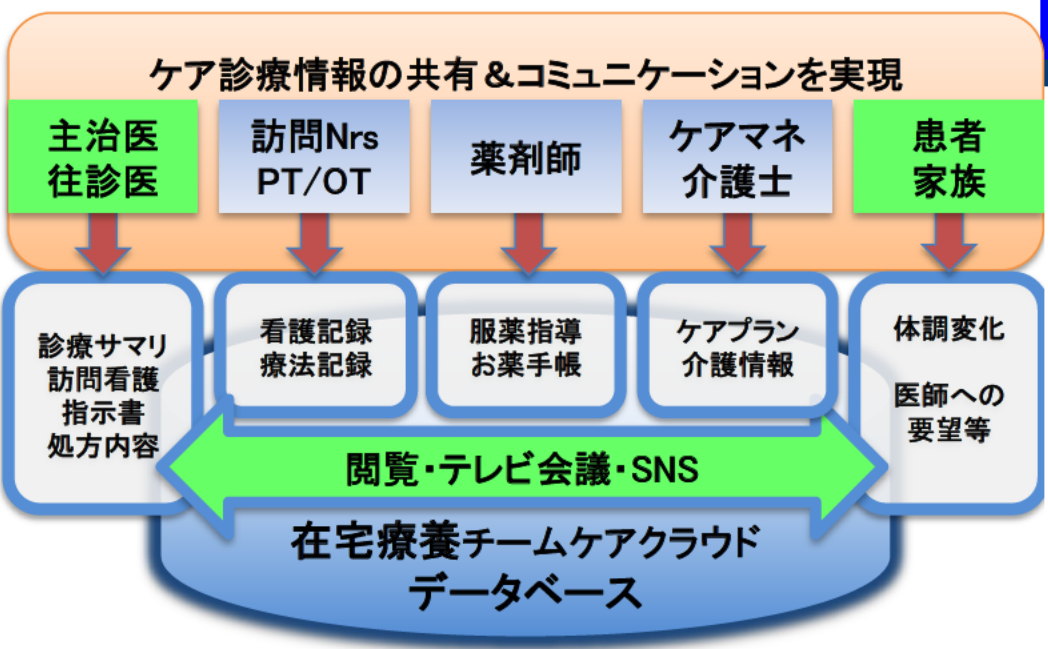
本プロジェクトの開発項目

1. 患者家族と多職種間の情報共有
2. テレモニタリング（バイタルモニター、人工呼吸器）
3. テレコミュニケーション

以上を統合したICT総合ケアシステムの開発を行う

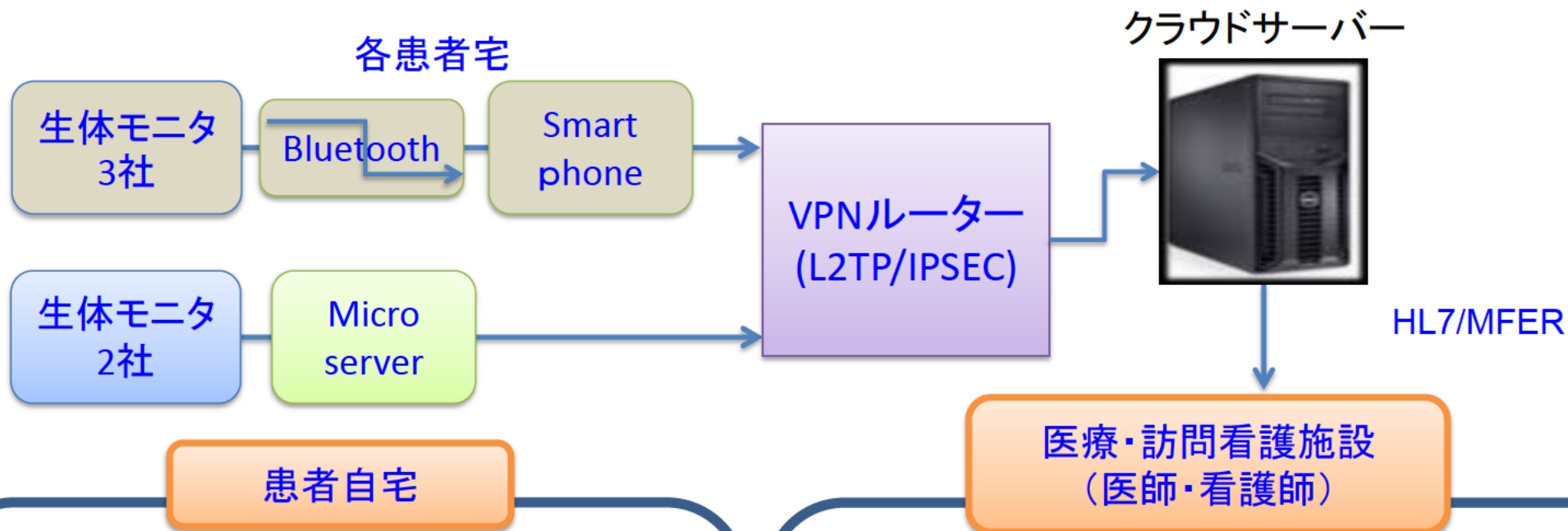
患者家族と多職種の情報共有: チームケアクラウド

- 自宅を安心・安全・快適な病室へをコンセプトに開発
- 多職種の患者情報をクラウドサーバで安全、効率的に共有
- 患者家族も含めたチーム内のコミュニケーションを実現
- バイタルサインの遠隔モニタリングなどによる見守り

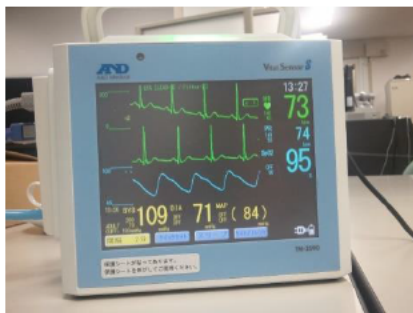


現在、長野県を中心に46チームで利活用

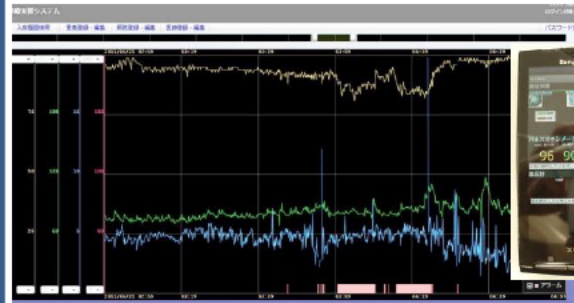
バイタルサインのテレモニタリングの開発



バイタルサインモニタ



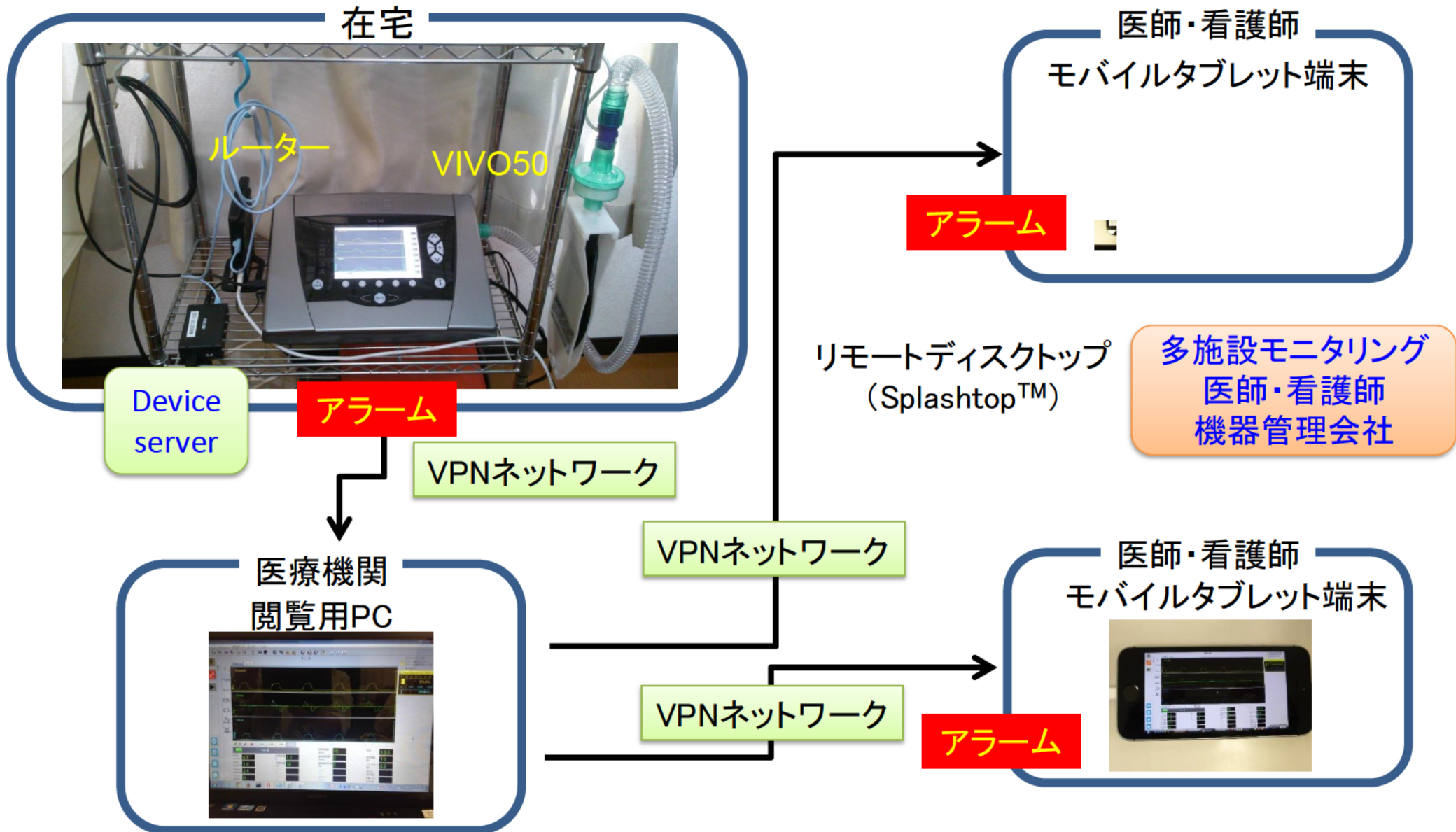
SpO2長時間記録



リアルタイムモニタリング



人工呼吸器遠隔監視・アラーム通報



テレコミュニケーションの開発

患者用画面「伝の心」

病院側



医師の映像

伝の心画面-PC



家族用画面
FaceTime



伝の心画面-iPad



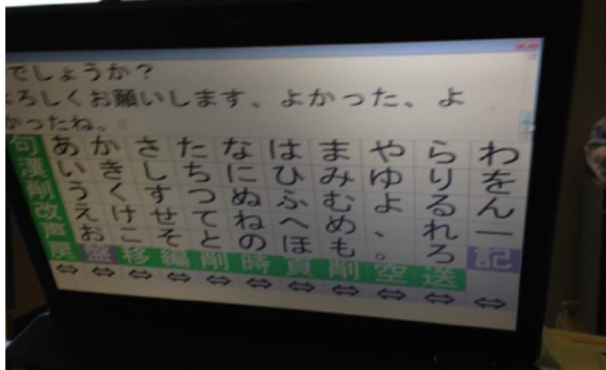
患者/家族
画面



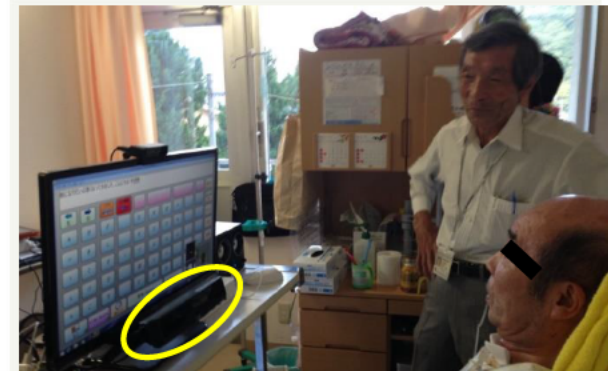
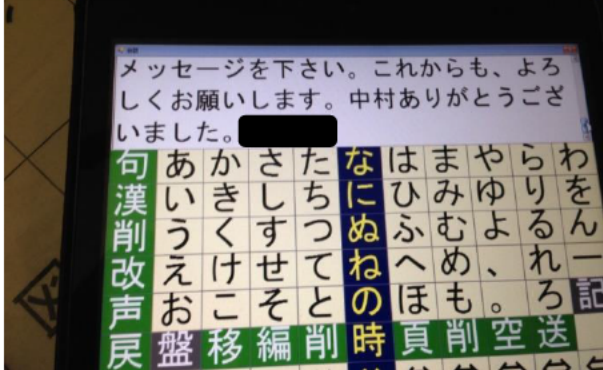
視線入力装置を用いた実証実験の様子



患者さんのPC「伝の心」画面



在宅コミュニケーション



日時: 2014年11月5日 10:42:41 JST
 今は、妹とメールをやっています。言いたい
 事が、伝えられるのでとても嬉しいです。

研究開発成果の展開及び波及効果創出の取り組み

- 本研究で開発したシステムは、在宅療養の課題に対し即時的な効果が期待でき、社会への影響、波及効果は非常に高いと考えている。
- システムの普及のために、学会・研究会などでの発表や医療・福祉行政が行う市民公開講座などでの広報を行っている。
- 運用維持にかかる経費については、課金の仕組みづくりの検討や地域包括ケアを担う行政に対する働きかけが必要である。